

大罪」と言えるのは、「戦争に負けた」ことだけではないだろうかと思う。私とほぼ同世代の台湾人の多数がそう認識している。

私の知っている限り、満州事変後、国際連盟で「日本はむしろ被害者」、と演説したのは松岡洋右^{ひろみね}だけである。より客観的に歴史の空間（スケール）を広げ、歴史の時間（スパン）をもっと長く伸ばしていけば、近現代史において日本の貢献はじつに大きく、いくら評価しても、し過ぎるということはない。

私は日本近現代史の史実の再検証を本書で進めたい。読者には、歴史とは何かという史眼を養い、全体主義史観の呪縛から解放されることを望みたい。

私はこれまでたくさん歴史書を書いてきたが、私のこれまでの歴史書の集大成として、この本を日本の読者に贈りたい。

第一章 歴史とは何か

一、認識された過去の事実は過去の事実そのものではない

「歴史」という言葉は、「歴史とは過去の事実そのものである」という意味で使われる場合がある。つまり「歴史」とは、「過去の事実そのものである」という意味での言葉の使い方である。このように、過去の事実であるという意味で言うならば、歴史とは客観的に存在するものということになり、その限りで不偏不党のものであり、変容することもなく、固定したものになる。このような歴史の見方は、歴史に対する正しい見方であるかのように思われる。

だが我々が実際に使っている「歴史」という言葉は、吟味すると、このような意味で使っているのではない。我々が実際に使っている「歴史」は、人間が認識して作り上げている歴史である。言い換えれば、我々が実際に語っている歴史とは、人間の認識を通してできあがった歴史である。つまり過去の事実そのものではない。我々は過去の事実についていろいろ議論するけれども、そこで言われている過去の事実は、あくまでも認識された過去の事実であり、事実それ自体ではない。

言い換えよう。現在この本を読んでいる読者も、過去にあった歴史に関してさまざまな知識を持っている。日本の歴史、中国の歴史、韓国の歴史、世界の歴史、生物の歴史、地球の歴史、宇宙の歴史等、いろいろな歴史について、断片的なさまざまな知識を持っている。その断片的

な知識には、前述の「歴史とは過去の事実そのものである」という「過去の事実」が様々に反映している。しかし過去の事実そのものではない。人間の歴史に対する認識は、過去の事実を写実しているのにすぎない。

だからといって、過去を任意に恣意的に勝手に認識してよいということではない。優先するのはあくまでも過去の事実であり、認識は過去の事実に従属して存在するものではない。

歴史にかかわって論争が生じた場合の最後の決着は、どちらの主張が過去の事実により近いかで決せられる。過去の事実からより離れた主張が優位に立つことはない。だから歴史は人間の認識によって成り立つものだと言っても、それが過去の事実に拘束されていることは明らかである。

だが、歴史を人間の行為として、文明時代に入った人間の諸々の行為として見るときには、歴史は過去の事実そのものではない、ということとは明確に押さえておく必要がある。我々が実際に語っている「歴史」という言葉の実際の意味は、こうした認識された過去の事実であり、過去の事実そのものではないのだ。

ということとは、我々が通常使っている「歴史」の言葉の意味は、認識された「過去の事実」を指しているのであって、客観的に存在する過去の事実と比べて、ずれや偏りが常にあるということになる。

中国初の官定「正史」は、「皇帝本紀」を中心に書かれた司馬遷の『史記』である。中国の開祖と

された四つの眼、多面の顔をもつ黄帝も、牛の角をもつ炎帝も、すなわち「三皇五帝」は伝説の天帝だった。天帝、つまり神様を擬人化した「歴史人物」が「歴史」として語られている。「古事記」も「日本書記」も神の代と人の代をはっきり書き記しているので、「記紀」の方が歴史認識としては、むしろ史実に近い。

「史記」の中で、史実に近いのは、司馬遷本人と漢の武帝とのかかわりが強かったところから、司馬遷の父が記述したとされる「楚漢」の争いだけが「史実に近い」と評価されている。それはあくまで「史実に近い」だけで、せいぜい、もっとも史実に近い歴史を知るのにすぎない。殊にいわゆる「正しい歴史認識」を認識することはむずかしい。

二、「認識」ということの厳密な意味

「認識された過去の事実」と言うときの、「認識」の厳密な意味を掘り下げておかなければならない。

私の専門は西洋経済史学なので、大学院生時代には、英文だけでなく、独、仏文までの原典もゼミでよく利用した。だから世界の書籍をかなり読める。しかし、明らかに限界がある。その点日本語をマスターしているとよい。日本は翻訳大国で、日本語をマスターすると、世界のいかなる古典も名著もたやすく読むことができる。日本では、世界のいたるところでいろいろな言

語で語られている古典や名著が翻訳されているのだ。ドイツ語も学んだけれども、必ずしもマスターしたわけではない。していなくても、日本ではドイツの哲学者カント（イマヌエル・カント）の哲学の本を読むことができる。インターネットの発達した今日であっても、あらゆる言語の古典や名著があらゆる言語に翻訳されているわけではない。世界の古典や名著を幅広く読もうとしたときには、日本語をマスターしておくのがよい。日本は明治以来世界の古典や名著を翻訳しまくった翻訳大国である。

朝鮮近代文学の父とされ、徹底的な民族改造論を貫いた一九一九年の「二・八独立宣言書」起草者の李光洙は、「日本語は優秀な日本精神を包蔵しており、日本文は今や世界文化を全部包摂しておる。だから、日本語を学ぶことは日本精神を学び、同時に世界文化の庫の鍵を握る」(「朝鮮半島の弟妹に寄す」)とまで説いた。

さて、そこでドイツ語で書かれたカントの「純粹理性批判」を読んでみた。そこに書いてあることなのだが、カントは「物自体は認識できない」と言っている。

我々は物を感性和論理を組み合わせて見ている。さらに言えば過去に蓄積した経験と組み合わせで見ている。つまり、物全体を見ているのではなく、物の断片を、記号化して受け取って、その記号を組み合わせて、「物」が何であるかを判断し、認識しているのだ。決して物全体を見ているのではない。つまりは、「物」自体を見ることはできないのだ。言い換えれば、物自体が認識されることはなく、物自体が認識に変わることはない。「物」に対する認識は、あくまでも認

識する者の主観によってできているのである。「認識」は、「物」から得られる断片的記号と過去の経験、それらを組み合わせてできているのだ。

もちろん、いかに断片的な記号によるものであると、その「物」を他の物から区別し特定することは十分に可能である。したがって特定の「物」に関わって複数の人間の会話は混乱することなく成り立つ。一人ひとりの認識の元になっている記号は、かなりの違いはあっても、どの「物」を指しているかはお互いにはつきり了解しているから、会話は成り立つのである。

歴史の問題に戻れば、歴史において捉えられている過去の事実は、あくまでも認識された過去の事実であって、それによって、過去の事実を特定することはできるけれども、過去の事実そのものではない、ということになる。

人間は「物自体を認識することはできない」ということは、「認識」の本質的問題である。歴史認識においては、歴史は人間の認識として存在するということを、特に強調して確認しておくべきである。

こうした物自体の認識から離れた、言葉だけの世界が過度になると、歴史は過去の事実から遊離してでたらめな世界に入っていく。そのことに飽き飽きして「陳腐な政治的言葉や決まり文句ばかりでは説得力がない。もつと数字的な根拠が欲しい」という声をしばしば聞く。台湾の方でも「数据」(数字的根拠)を求める声は社会のすみずみまで広がっている。それは世界的現象の一つでもあるのか。「数字的根拠」がもつとも説得力があり、客観的にして数学的と考えた

からだろう。

しかしその数字さえ、中華世界ではたよりにならない。中華世界の人々は誇大な装飾語の形容詞の方が好きで、たとえば「歴史的記述」についても飢饉や瘟疫の死者については、「死者大半」とか「十中八九」などの概数しかなく、流言蜚語からくるものをそのまま文字化したものが多い。

もちろん民族性、風土からくるのも少なからう。私がよくとりあげる中華文明圏の国々と人びとは、「ウツつき、ホラ吹き、裏切り」という特質があり、言葉を事実から遊離させて使う。戦後中国プロパガンダ最大のヒット作である「南京大虐殺」といわれるものは、一時虐殺一〇〇万人の数字まで出していた。現在の「三〇万人以上」という説は、中国共産党の党議で「決定」した数字である。

朝鮮人「強制連行」の数字も一時「八〇〇万人以上」までの数字も出た。「朝鮮人慰安婦」の数字も目下韓国などで主張されている「二〇万人」は、いかなる根拠もない。

そもそも社会主義の「計画経済」における最も基本的な数字は、人口数である。人口さえ把握できない国は、科学的社会主義国家としては成り立つはずもないだろう。しかし社会主義中国の人口について、政府各機構のドンブリ勘定の数字はつねに二億前後の差が出ている。今でも言えるのは、約一三億台から一五億台である。趙紫陽総理が、八〇年代に訪日したおり、記者に質問されたときでさえ、「天曉得」(神様しか知らない)と言わざるをえないほどだった。もちろん

んそれは決して二〇世紀以後の中国に限った話ではない。一九世紀の清の時代には「四億の民」「四百余州」と言っていたが、清朝でさえ、各行政機構の人口数は一億人の差があった。

人口に限らず、日本はすでに四〇〇年も前に、太閤検地により可耕地面積を知っていた。しかし中国は一九九〇年代になってからの土地センサスの結果、やっと四〇パーセントに当たる隠し田が発覚した。そういう国だから、正確な歴史「認識」はたして可能だろうか。考えさせられることがじつに多い。もちろんそれは中華の国々の歴史文化への「正しい認識」の限界の一つでもある。

不正確にして不完全な歴史の真実についての「歴史認識」そのものが「認識」の壁になるのだ。近世、近代になってから、やっと「考証学」と「弁偽学」が誕生し、偽経、偽史の考証が流行り、ウソの経典、ウソの歴史の真相解明にとりくんでいる。

三、「認識」と生の衝動に達づく共通の尺度

「物」自体は認識できず、「認識」とは認識する側の者が、認識するという一方的な行為によってできるものだとするれば、認識する側の人間とはどんなものなのか。人間と認識の関係から言えることを十分に考えなければならぬ。人間は生きており、生の衝動を持って存在しているゆえに、認識は人間の生の衝動に大きくかかわっている。

死はなぜ悲しいことなのか。死はなぜ怖いものなのか。その理由はともかく、生きている人間の通性として死は悲しいことであり、怖いことである。

そうした人間が寄り集まって過去の事実について認識し話し合うのだから、過去の事実を認識するといつても、過去の事実のどこを強調して認識をするかは、認識主体の側の問題である。人間によって「認識された過去の事実」は死に関するものが多い。これはこの人間の通性に基づいて認識されているからである。歴史はその点でさらにいつそう人間的なものなのだからということが分かる。

一九世紀ドイツのデイルタイ（ヴァイルヘルム・デイルタイ）が、彼の言う精神科学によりこの問題をよく説明している。すなわち、人間の精神的活動の根源には、生の衝動があり、人間の精神活動はそこに存在する人間としての共通性を基盤にしてなり立っている、という主張である。

光として見る電磁波は、人間同士では共通認識の範囲内であり、赤と見える電磁波は誰にも赤く見え、赤の印象を我々の精神に共通に与えている。

動物の中には人間には見えない光が見える動物がいる。その動物はその光をどのような印象で受け止めているのかは、人間には分からない。芸術作品は人間に共通する感性に基づいて、人間が分かりうるようにできている。

すなわち歴史とは、認識のために過去を見つめるといっても、自然科学のような自然という

対象を観測して生み出している認識ではない。生の衝動、つまり生きるということの衝動に大きく拘束されながら、人間として共有する共通性を基にして認識をしているということになる。

人間としての共通性を基にして成り立つ科学を精神科学と名付けるならば、歴史ないし歴史学はまさに精神科学である、ということになる。ディルタイの言うとおり、歴史学はまさに精神科学である。

四、関心の大きさに基づき歴史の記述が残る

歴史に関する記述は関心の大きさに比例して長くもなり、短くもなり、無記録ともなる。具体的に例を挙げて考えたい。

國武忠彦編著『語り継ぐ日本の思想』(明成社 二〇一五年)によると、民俗学で有名な柳田國男の昭和十年の『郷土生活の研究法』という本で、歴史ないし歴史学にとって重要なこととして、次のようなことが書かれている。

徳川三百年の間に一度しか起こらず、村によつてはまるまる起こらなかった百姓騒動の如きは、大事件だったに相異はないが、ただ単に大事件だから書いて残すという以上に、

これにたずさわった代官や村役人などの、特に自己の立場を公辺(役所)に明らかにしようとする動機が、細かすぎるほどの文書を作成せしめたので、いわばその当時の人心の動揺興奮を、窺がわしめる資料というに過ぎない。今になって考えてみると、他の残りの太平無事の二百数十年間の推移の方が、我々に取っては重要なのであるけれども、(中略)

別に刺激もなくまた責任も考えられなかったが故に、書いて残して誰に見せようとする必要も認められなかったのである。だから(略)今ある文書の限りによつて郷土の過去を知ろうとすれば、最も平和幸福の保持のために努力した町村のみは無歴史となり、我邦の農民史は一揆と災害との連鎖であつたが如き、印象を与えずんば止まぬこととなるであろう。

幸福に生きることは、最も価値の高いものである。しかし、実際の歴史記述では、平和な過去は記録に残らず、天変地異による災害か人間同士の争いのみが記録に残りやすいのだ。

学校で習う歴史においても同じだ。「○○の乱」とか、「○○の変」とか、「○○の戦」とか、戦闘を伴った事件が歴史の教科書には圧倒的に多く記述されている。日本はじつは中国や韓国と比べれば、武力による戦闘は極めて少なく、あつても規模は小さいのであるが、教科書を見れば日本は戦闘ばかりを繰り返してきたような印象を受ける。

私は学生時代は「戦争」の年やら「人名」ばかり暗記にこれ務めた。学者や学生の間で、歴史と

は、「誰が誰を殺した」ばかりの科目、という嘆きもよく耳にした。

歴史記述は、平和な時代や幸福の続く時代よりも、事件、天変地異、ハブニングについて主に書き記す。代表的なのは、孔子の編とされる編年史『春秋』と『資治通鑑』、『続資治通鑑』、『明通鑑』など。『天変地異』については、たとえば「正史」の『五行志』や『文献通考』の「物異考」などに多い。

『資治通鑑』の現代語訳者の柏楊が「中国史に戦争のない年はない」と言うのだけれど、それは主に編年史の『資治通鑑』の戦争記録による。支那人の共喰いについては『資治通鑑』にも「人相食(む)」など「戦争」と同じく年代順に記録されている。それは「正史」の「天官書」や正史の「天文志」まで記述しているので、天変地異と同様、異像や凶像として特記されている。

もちろんオーバーと思われる記述がある。たとえば、南北朝時代の武将侯景による「南京大虐殺」後、『資治通鑑』『梁記』では、三呉地方(江南)の漢族移住民は、北朝へ奴隸で売られ、ことごとく「死に絶えた」と記されているが、隋唐の時代には、晋王朝など南朝系の貴族と漢系の貴族も生き残っていた。貴族の連合王朝が、隋、唐である。

五、歴史への関心は文化や文明によって異なる

歴史への関心は、文化や文明によって異なることについて、ここで述べておこう。

はたして「歴史認識」の問題が、血を流して闘わなければならないような、死生にかかわる問題なのだろうか。インド人を見るとよい。インド人は、中華文明に冒されている人たちほどには歴史には関心がない。インド人はなぜ歴史に関心が薄いのか。インド人からすれば、歴史は時間的経過の一現象でしかなく、すぐに消えてしまう現象に過ぎないのである。インド人にとって歴史以上に大切なのは、人間にとってもっと根源的な問題であり、関心ある問題としてそれを問うているのである。例えば「生」とは何か、「死」とは何か、そうした根本問題である。インド人はこうした問題に問いかける宗教や思想や哲学などについての思索や探求が重要であるとしている。インド人から見れば、中国人のように歴史に関心が湧かないのは当然である。

では、どうして中国人は、中華文明圏において歴史に関心が強いのか。

その原因の一つには、中国人の歴史好きは漢字を使っていることも関係しているようだ。以下、そのことに少し触れておきたい。

漢字は黄河流域に生まれた象形文字である。つまり、漢字は表意文字であって、表音文字ではない。それゆえ文字と言語との間の密接な関係が成立しない。

青銅器や石碑に刻まれた金、石文や古代経書のような木竹などで書かれた古文は、戦国時代に書かれた諸子百家の経書とは文体が違っている。現在、漢文と称されているものは『論語』を初めとする諸子百家の文体である。これが文語体となり、二千年あまりにわたり東アジアを漢字文化圏として支配してきた。文語文は戦国時代の口語文(白話文)だと言われることがあるが、

これは間違いである。当時、楚の国は漢語とは違う楚語を話し、呉越は呉語と越語を話していた。

つまり漢字は、言語を異にする多人種複合社会で、交信のために概念記号として道具となり、意思伝達の手段として使われてきたのだ。特定の地域で、特定の言葉と結びついて、特定の意味が与えられ、一つの文字体系として機能してきたのだ。

天子の近辺で使われていた言葉と意味が、天下に通じる文字として漢字に結びついた。歴史的に言えば、一つの字形は、一方では天下共通の意味を持ち、他方では土着の言語と結びついて別の意味を持った。そして中華文明圏の統一化、共同化が進んで、天子の周辺で使っていた言葉による発音と意味とが、全体的に共通化していったと言えるのだ。

地球上で五千か八千かそれ以上あるといわれる言語の中で、日本語は最も音節数の少ない言葉の一つである。子音と母音を組み合わせる以外に複雑な音節がない。しかし漢語は「音節ごと」に一つの概念を持つことが基調となる。「音節語」の言葉ができて、切り離すことができる。ヨーロッパの言語のように単数・複数の区別もなく、格による変化もなく、過去形・現在形・未来形の時制表示の必要もない。

漢語は異言語間の交信手段として書き記す文字だけの言語なのである。

中国古代の文明といえば、黄河文明ということになる。最近の考古学の成果であるが、古代には揚子江の上流には巴蜀文明という文明があり、揚子江の支流淮河には淮夷文明があり、そ

のほかにもいろいろ文明があったことが確認されている。

このように中国大陸にはもともと多種族の複合文化集団、文明集団があったのである。そしていまだその存在は明確には確認されていないが、夏人が夏王朝を建て、殷人が殷を建て、周人が周を建てた。彼らはもともと遊牧民と密接な関係があつて、中原に入り農耕民族になったのだ。

春秋時代になると、強国、秦が登場する。そもそも秦も「西戎」という異民族である。ペルシア系ともいわれる。だが中国統一を果たすと、彼らも漢字文明に同化し、漢字を交信と記録の道具として用いる。

春秋時代末期、揚子江文明から生まれた呉人が越人に滅ぼされ、越は楚人に滅ぼされる。そして呉人も越人も楚人も、黄河文明に発する中華文明に加わることになる。その間、漢字が、各地で違った言語に使われ、やがて天子の使っていた発音と意味に収斂していく。官は中央から地方へ派遣され官語をしゃべる。地方は官語ができる吏が官の官語を地方語に通訳している。「官吏」と称せられるが、日本ならば、官は中央省庁の役人、吏は地方の役人に相当する。

その間、激しい戦争が続き、戦争はあまりに激しい生活上の事実であるゆえに、記録されていく。やがてそこから新しい王朝はその前の滅んだ王朝の歴史をまとめる、という慣習が中華文明として生まれた。

こうして中華文明は漢字を使用する文明となり、記録がことあるごとに行われ、そのことに

よって過去へのこだわりが生まれ、超保守的にして尚古主義に陥らせることになった。現在も、言語も文字も異なる非漢族に強制的に漢字・漢文を学習させ、同化している。清朝を開いた満州女真族は、中華世界を三〇〇年近くにわたって支配してきたせいでもあるが、もともと別の言語を持ち、字も別なものを持っていたにもかかわらず、現在の中国共産党支配のもとで、その言語と文字は滅ぼされた。現在は満州語ができる満族は一〇万人に一人しかないと言われる。

ほんらい、黄河の中原に住んでいた農耕民は、農耕のできないところに進出する必要はないので、北方の草原地帯に移ることはなかった。むしろ北方民族による掠奪、侵略を恐れて、馬が越えられないように長城を建設して、守りを固めていた。だが、それでも匈奴をはじめ「五胡」といわれる夷狄や契丹族、女真族、蒙古族は長城を越え、農耕民を征服して中原に王朝をつくった。

中原の農耕民を支配した民族は、ウラル・アルタイ語系で、主にツングース系、モンゴル系、トルコ系と三つの語系に分かれるが、時代を異にしつつも、長城を越えて南下し、漢字文明を支える主体になっていった。もといた農耕民の一部は南方に追われつつ、越人を吸収したり、追いついたりした。越人の一部はさらに南下し、東南アジアに移動したり、山岳地帯や高原地帯に追われていくのである。現在のベトナムやタイ、ビルマに居住する人々の多くは中国大陸先住民の末裔である。そしてタイやビルマは、漢字文明を拒否し、インド文明の影響を受けた

人たちである。

したがって、中華民族といっても実体のない民族である。あまりにも激しい戦いがひっきりなしに起こる、戦争の常態化の中で、漢字を交信と記録の手段にしてきたいろいろな種族の集合体であり、中華文明に同化し、それを積極的に担うようになっていった民族だということになる。

ところで日本人も歴史の好きな人たちだと私は思っている。なぜ日本人は歴史が好きなのか。思うに、日本の文明も、中華文明の傍で形成された文明で、中華文明の影響を著しく受けている。天武天皇が命じて、養老四年、七二〇年に完成した『日本書紀』は明らかに中国の王朝の歴史書に倣って編んだものといえる。だがもう一つ理由があると思われる。日本文化にある神道の影響で、先祖を大切にする気風があるからと思われる。同じ歴史好きでも原因は中華文明の場合とは違うようだ。

『春秋』『資治通鑑』などの編年史も、『史記』をはじめとする「四史」と称される「正史」も、国史を中心とする自己、自国への「歴史認識」の歴史記述である。

かくして中華文明圏には歴史の記述は多いのだが、今日的な意味としての「歴史」という言葉は、和製漢語からくるもので、その意味するものは漢人のもではない。漢字、漢文の本場である漢字文明圏内の漢人には「歴」や「史」があるが、歴史を史実に合わせて客観的に考えるという意味の「歴史」という概念は日本からの舶来品である。つまり、漢字文明圏では歴史にかかわ

る記録はたくさん行われるが、「歴史とは何か」について冷静に考えてみることはなかったというのである。

六、歴史認識のうち最も多く存在するのは自己への歴史認識

歴史が、歴史認識が生（せい）の衝動（しょうどう）に基づく人間の行為であるとするれば、その多くは自己への歴史認識であるということも、「歴史とは何か」を考えると、押さえておかなければならない。

歴史認識には、生物の歴史とか、地球の歴史とか、自然科学の対象となるものを対象としているものもある。しかし「歴史とは何か」で問う歴史とは、人間にかかわる「過去の事実」への認識としての歴史であり、しかもそのうち圧倒的に多いのは、個人にしる、国家にしる、自己にかかわる歴史の認識であり、個人としての自分、国家としての自国、それへの歴史認識である。

人は何ゆえに自己への歴史認識を最も強くするのか。これは生の衝動に基づく歴史であるゆえに、自己の過去を確かめ、自己のアイデンティティー（主体性）を確立し、自己の将来に向けてどのような方向に向いて進んでいくにかかわって歴史認識をするからである。

生の衝動に基づいた自己のための歴史認識であるとすれば、自己のためのその歴史認識はすべての人間に均しくある自己愛によって、ずれや偏りはいつそう大きくなるであろうことを覚悟しなければならぬ。さらに自己への歴史認識に、主観や我執（がしやく）からのずれや偏りがより大

く生じるのが普通である、ということを確認しなければならない。

自己愛が働けば、歴史認識にあつて、過去の事実で誇るべき自己の優位な部分は強く認識し、否定的な劣位の部分については弱く認識する、というような傾向が出てくるのは珍しくない。

もちろん自己の将来を考えれば、否定すべき劣位にあることについて強く認識することこそが必要であり、否定すべき良くないことをこそ強く認識するようにしなければ将来のためにならないということとはしばしばある。が、通常は、自己の弱点は認識したがらず、自己の優位はより大きく認識しようとする傾向がある。

自己の積極的で肯定できる部分を強調することは、生きるために健全なパーソナリティー（個性）を形成するために必要だと考えれば、自己中心の主観に基づく歴史認識の歪みは、むしろ肯定的に認めなければならないことになる。

主観に基づく歴史認識は、客観的な過去の事実からずれや偏りを一層大きく生み出しているから、それ自体は良いものとは言えないかもしれないが、生きるための自己認識の、そのための歴史認識であるから、主観から出てくる歪みについては人間同士お互いに寛容でなければならぬと分かる。

個人ではなく一国の歴史であつても、その国の国民は愛国心を持つて自国の歴史を見なければならぬ、ということになる。中華史観は自己中心にして優越主義のかたまりである。中華思想に基づいて成り立ったものである。あれほど独善的な「正しい歴史認識」を他人にまでしつ

こく押しつけるのは、まさしく中華思想そのものである。中華の中心にいる人たちは、それで良いのだが、それを他の民族や国民にそれぞれの愛国心を尊うような「正しい歴史認識」を押つけてはならない。

七、意味を読み取るために比較を必要とする理由

歴史認識の多くは自己への歴史認識であるが、自己への認識の多くは、他者との比較において意味を持つ。この点も「歴史とは何か」を考えると重要である。

自己のアイデンティティー（主体性）の確立のために必要な歴史認識として重要なのは、過去における自己の特色の認識である。自己の特色は、ほんらい、他人との比較で浮かび上がってくるものである。個人としての自分はどのような特色を持つのか。それは基本的に他人と比較して成り立っている。

個人ではなく、国家単位で考えてみよう。自国がどのような特色を持つのか。前述のごとく、日本の歴史教科書には、「○○の乱」とか、「○○の変」とか、「○○の戦」とか戦闘の記述がたくさんあり、それだけを見ると日本には戦闘ばかりあったように見える。これを中国や韓国の歴史と比べると、戦闘の数は圧倒的に少なく、あっても規模は小さい。したがって日本は穏やかな歴史の国ということになる。もし仮に、中国や韓国の歴史にまったく戦乱がなく、穏やかな

歴史が展開していたとすれば、日本の歴史は同じ歴史でも戦乱の多い歴史ということになる。

日本最大にして、天下分け目の戦いである関ヶ原の戦いでも、東軍七万、西軍八万、あわせて一五万ほどと推定されている。その程度の動員数は、二〇世紀の民国時代の初頭に華北各地をあらしまわった「白狼匪」と呼ばれる匪賊集団の数でしかなかった。中国史上有名な天下三分の「赤壁の戦」やら、南北朝の大勢を決めた「肥水の役」だけでも、北方の大軍は一〇〇万と号する軍勢であった。民国時代の国民党軍の内戦でも閻錫山の北京政府と蒋介石の南京政府との対決で知られる「中原大戦」は双方が一五〇万人を動員した対決であり、戦後国共内戦の天王山だった「三大戦役」は、双方合わせて数百万人の対決だった。日本の戦争の主役は武士であり、劇場型戦争だから、中国大陆のような「全ての人民を巻き込む戦争」とはまったく異なり、戦闘員の数が少なく、犠牲者が少ないのはごくあたりまえのことだ。

他の国の歴史は知らないで、日本の歴史のみを学んだ場合には、このような日本の歴史の特色は分からない。そのことが分からないままに、一見戦闘ばかり続く日本の歴史を学ぶとどういうことになるか。

世界がグローバル化し、地球全体の視野で日本を見つめなければならぬときに、このような比較の視点が教えられないのは、欠陥というべきであり、日本の歴史教育は改められなければならない。

中国近代文学の父とされる魯迅は「ものを比較しなければその優劣は分からない」と口グセ

のように言った。国自慢の話ばかりでは、愚民になりやすいのは自明の理だ。

今では比較文学だけでなく、比較音楽から比較文化、比較文明論などが学界で流行っている。歴史のみ、比較から無縁ということがあつてはならない。

ことに文化風土が違えば、国民性も異なり、地方によつて民俗も違う。その違いを認知するかしないかが国々にとつて大きな課題である。中華圏の国々のように、なんでもかんでも「歩調一致」「万場一致」でないと気が済まない「全体主義」の考えは、教科書まで「国定」や「党定」でないと気がすまない。こつちこそ「正しい歴史認識」だと言つて、自分、自国だけでなく、他人、他国に押しつけることは、じつに迷惑千万だ。

「十人十色」を認めるか認めないか、それがもつとも根源的な思想の原点であり、日本と中華、ヤマトイズムと中華思想、つまり、史観はそこが分かれ道である。和を求めるか、あるいは同を求めるかの原点はそこから始まる。

多源性、多様性を許容するか、それともどうしても森羅万象の世界を一元化しなければ気が済まないかに、日本と中華との違いがある。

日本で江戸時代初期に山鹿素行^{やまか すぎぎょう}という兵法家、儒学者がいた。この人物が『中朝事実』という著作物を著している。ここで中国と日本の歴史を比較している。中国は易姓革命ばかりしており、安定しないが、日本は天皇のもと、易姓革命はなく、日本こそ文明の中華であるというようなことを述べている。中国が易姓革命の結果、文化の発展が停滞して、多くの人民が苦しい目

に遭つているということは、比較する気で比較すると、直ちに分かり、それによつて日本の歴史の特色を把握することができるのである。

ここで日本の歴史教育の欠陥について、まとめて述べておこう。私のような台湾の出身者が、外から見ると、日本の学校で教える歴史教育の欠陥がよく見える。

現在使っている中学校学習指導要領によれば、中学校の日本史の歴史教育の目標は「我が国の歴史の大きな流れを世界の歴史を背景に、各時代の特色を踏まえて理解させ、それを通して我が国の伝統と文化の特色を広い視野に立つて考えさせるとともに、我が国の歴史に対する愛情を深め、国民としての自覚を育てる」となっている。自国の歴史教育の目標として極めて適切に規定している。

しかし実際の学習活動の中には、日本の伝統と特色は何なのかを、考えさせるためのあるべき活動がない。それにどのようにして自国の歴史に対して愛情を深めるのか、そのための活動を促す規定がない。学習指導要領全体では、子供の表現力を身につけさせるとか、アクティブ・ラーニング（自主的にして能動的な学習）を強調しながら、歴史教育のこの目標に従つて実際に取り組むための活動への促しがない。その結果、歴史上の知識のようなものは身につけているが、比較がないのでその特色がつかめず、その結果、実際は自国の真の姿を知るといふ歴史教育の目的を十分に果たしていないことになる。

海外の子々が他国の子供たちとそれぞれの国のお国自慢をしているとき、日本の子供だけが

何も言えない状況になっているとよく聞くが、歴史教育の失敗の結果である。日本の子供は天皇がどのような役割を果たしているのかについても、一言も話せないのだ。

八、歴史認識から影響を受ける人間の歴史的行動

歴史認識は人びとのアイデンティティー（主体性）形成に関わり、人々の歴史的行動に重大な影響を与える。そしてそのことが、その国の歴史の特色を形成する要素となる。このことを理解するために、中国と日本の歴史を比較した具体的な例を一つ示そう。

中世の初め、関白藤原忠通の子で慈円という僧侶が、一二三〇年に『愚管抄』という日本で初めての政治評論書を著した。

慈円は中国の歴史に鑑みて、すべての王朝には寿命があり、天皇の率いる朝廷も滅びる可能性があるとした。しかし日本の朝廷は滅びなかった。

慈円が『愚管抄』を書くきっかけとなったのは、保元、平治の乱である。このうち保元の乱は、五歳で皇位についた第七十五代、崇徳天皇が、二十三歳で無理矢理三歳の近衛天皇に譲位させられ、この近衛天皇が十七歳で亡くなったとき、自分が皇位に復帰するか、子の重仁親王が即位するかを期待していたが、期待は実らず、同母弟の後白河天皇が即位した。不満の昂じた崇徳上皇が通常日本では考えられないことであるが、兵を使ってクーデターを起こした。そして

あえなく失敗して讃岐に流されたのである。この政変の中で、平氏と源氏の争いが起こり、源氏による鎌倉幕府が一一九二年開かれる。

そんな時代の流れのなかで、慈円は世の中には「道理」というものがあり、日本の大和朝廷に始まる朝廷も寿命があり、滅びる可能性があると言ったのである。ところが同じころ、承久三年（一二二一年）の承久の乱でどんなことが起こったか。

承久の乱というのは、鎌倉幕府の北条義時が横暴であるとして、後鳥羽上皇が、鎌倉幕府打倒のために兵を挙げたのがきっかけである。上皇の兵を迎えた鎌倉幕府は敗れるどころか勝利した。しかし鎌倉幕府側は朝廷を滅ぼさず、幕府は仲恭天皇を廃し新しい天皇を立て、そして三人の上皇を遠方の辺鄙の地に流した。

天皇より征夷大將軍の位を得て天皇の下にある者が、日本の最高の権威である天皇の、さらにその上にある上皇を遠方の地に流したのであるから、それだけでも大変なことで、まさに朝廷は滅亡の危機にあったと言える。しかし時の執権北条義時は朝廷から政治を預かる幕府の、その執権としての立場をわきまえ、朝廷そのものを倒そうとはしなかった。また、たとえ義時が仮に滅ぼそうと思ったとしても、そのために行動を起こせば、どれほどの騒乱が起こるか。朝廷を守ろうとする兵が続々と出てくるであろう。中国や朝鮮のように易姓革命のような動きは日本のどこからも起こらなかった。

この時の両軍の戦い方に日本らしさが十分に出ている。

鎌倉幕府の執権の北条義時は、朝廷からの兵を迎えうつ兵の総大将としてその子泰時^{やすとき}を任じたが、出兵に当たって、義時は泰時からの問いに答えて、もし朝廷の軍が、天皇の御旗を立てて上皇自らが兵を指揮して攻めてきた場合は、兜を脱ぎ捨て弓の弦を切り、ひとえに畏^{かしこ}まって、身は上皇にゆだねよ、もしそうではなく兵だけ押し寄せてきたならば、命を捨てて千人が一人になるまで戦え、と答えた。

日本の歴史を回顧して、そこから出てくる歴史認識から、この歴史的瞬間に、鎌倉幕府の武士は、中国や韓国の武將とは違つて心の底に朝廷を尊ぶ思いを秘めており、このように行動したのである。それが日本の伝統となり、さらに後世の者の行動に影響を与えるのである。

文化風土が長くつづくと、歴史と伝統ができあがり、その結果伝統を変えていくのはとても難しいものになる。

易姓革命の国、中国でも違つた意味で伝統は強かつた。政治改革を、中国では「変法」と呼ぶ。秦^{しん}の始皇帝が中国を統一して以来、「変法」は一つも成功したことがない。有名な宋^{わうあんせき}の王安石の変法も、清^{せい}の戊戌維新^{ぼししん}も最後は失敗してしまつた。

中華帝国が辛亥革命によつて終焉^{しゆうえん}を迎えても、中華民国は国民国家造りをめざして、逆に史上空前の内戦国家となつてしまい、国共内戦後に成立した中華人民共和国も、約二〇年後、文化大革命の「十年の動乱」に陥つた。

二〇世紀に入つて中国は帝国から民国、そして人民共和国と、国体も政体も二転三転し、手

を変え、品を変えても、うまくいかなかつた。

天子としての皇帝がいなくなると、中国人は、心の中にある神を失つてしまうから、不安になる。だから初代大總統の袁世凱^{えんせいがい}が一時的に帝政を復活したり、清朝最後の皇帝の宣統帝が満洲国で復辟^{ふくへき}(退位した君主が再び位に就くこと)することが出てくる。それは中国に限らない。フランス大革命後にも「アンシャンレژیム」(王政復古)の嵐が吹きまくつた。習近平が毛沢東主義への復活を目指しているのも、皇帝がいなくなると、中国が不安定になるのではないかという万民の声に応える必要があるからだろうか。

日本は、神代から血のつながりをもつ天皇が歴史と伝統になつており、いくら藤原家や源氏、北条、足利、織田信長、徳川家など巨大な権力が出てきても、易姓革命はできない。せいぜい天皇と権威と権力を分轄^{ぶんかつ}するに止まる。そこが「歴史と伝統」の力であり、万世一系の天皇の国でも重みでもある。

九. 地政学的に影響を受ける歴史的行動

ただし、重大な歴史的行動に影響を与えるのは、歴史と伝統ばかりではない。根本に地政学的な影響があることも見落とせない。

一国の歴史を見ると、地政学的な条件からくる影響は決定的な要素である。

日本は、海に囲まれ、外敵の侵入がほとんど不可能な地政学的条件の下にある国である。地続きで外部から容易に侵入できる地政学的条件の下にある場合、たとえその国自体には争いがなく、戦乱の世になる原因が内にない場合でも、周辺に強力な武力集団や武力国家が興り、襲ってきたときには、望むと望まないにかかわらず、戦乱の国となる。中国や朝鮮半島の場合はまさにそうだった。朝鮮半島は北方が中国大陆と地続きであり、後の三方は海であり、中国の内陸の場合ほど外敵に侵入されることは少ない。それだけ易姓革命の数は中国の場合より少ない。韓国の統一王朝は統一新羅、高麗、李氏朝鮮の三つの王朝だけである。しかもこのうち統一新羅から高麗への王朝の交代は、高麗が新羅を武力で倒して交代したのではなく、新羅から譲られる形で王朝の交代が行われた。武力で前王朝を倒し、新しい王朝を建てたのは李氏朝鮮のみである。李氏朝鮮は易姓革命を実行した。そのため日本のように易姓革命のない歴史を展開させることはできなかった。

朝鮮半島の歴史をもう少し詳しく見てみよう。高麗の將軍李成桂は、元を倒し新しく中国に興った明が高麗を侵そうとするのに対して、明と戦うべく差し向けられた高麗軍の將軍であった。が、明軍に対し勝ち目のないと見た李成桂は高麗の都の開京(開城)に引き返し、高麗王朝を倒し、一三九二年、李朝を開いた。高麗王朝は広く国民から支持された王朝であったから、一將軍にすぎない李成桂がクーデターを起こしても、日本であるならば、高麗王朝を救おうとする武力集団が澎湃と興って、クーデターは失敗に終わるはずである。しかし李成桂の背後には

新しい王朝を開いた明の強力な兵力が控えていた。兵を挙げて高麗王朝に義を尽くそうとしても、成功する見込みはなく、李成桂のなすがままになるよりほかはなかった。新羅が唐と結んで、六七六年統一新羅として建国した先例がある。つまり国外の兵力を使って勝利した、という例から得た歴史認識によって、高麗王朝下の他の武力集団は、日本の武士のような行動は取れなかった。李成桂が高麗を倒したとき、不満を持った武將は多数いたにもかかわらず、どうすることもできなかった。国外の兵力が直ちに侵入してくるという地政学的な条件の下では、国内で義に基づいた行動も起こしにくいのである。

李成桂は「朝鮮」という国名まで明の太祖洪武帝に下賜してもらい、その宗主国からのお墨付きを得て、李氏朝鮮を誕生させたのである。

このように地政学的な条件が決定的な要因となって、国民から必ずしも強い支持を受けることもなく、武力で開いた王朝は、それまで伝えられてきた朝鮮の文化を政治の力によって壊してしまった。その結果、朝鮮の文化は自然な発達が殺がれ、それゆえに決定的な欠損を抱え込むことになってしまった。

朝鮮では、高麗王朝の下、仏教文化が花開いていた。高麗王朝によって大切にされていた仏教は、新しくできた李朝になじむことはできず、これに怒った李朝は仏教を大弾圧した。その結果、朝鮮から仏教が排除され、朝鮮の文化は重大なる欠損を持つことになる。

六七六年新羅が朝鮮半島を統一したとき、韓国の仏教は日本に先立ち深いものがあつた。元

曉きようという僧侶がいた。統一新羅の建国の少し前のころだが、元曉は唐に行つて仏教を学びたいと思ひ立ち、旅に出た。あるとき山の洞穴に宿を取ったが、夜中、喉が渴き手を伸ばしたところ、水の入った器が手に当たり、その水をおいしいと思ひながら飲んだ。翌朝目を覚ますと、水の入った器だと思つたのは、罈しんねいだった。思わず吐き気を催したが、次の瞬間、悟った。世の中のすべては気持ち一つにかかっていると。夜中あのようにおいしく飲んだ水が、罈の中の水だと分かつたときには吐き気をもよおした。すべてのことは心にかかっているという仏教の悟りを、この瞬間に得たのである。元曉は唐に行かなくても仏教は学ぶことができるとして、新羅にとどまつて仏教の研究に専心した。

新羅、高麗でここまで深く花開いていた仏教および仏教文化が、李朝の下で、寺は壊され、僧侶は追放され、仏教は消えていった。朝鮮王朝は仏教の寺院を道教の寺廟じまうにかえ、仏の代わりにも明の皇帝をはじめ、孫悟空や猪八戒を神様にして拜むようになったのである。仏教の消滅は、韓国、朝鮮の文化の欠損というよりほかはない。

李成桂がクーデターを起こしたとしても、高麗王朝は倒さないので、高麗王朝の王の下、日本のように幕府を開くなどして権力の掌握だけで止まつていたらどうであらうか。

李朝は王朝成立後、高麗の最後の王を殺し、隠れていた王族に安住の島を与えると云つておびき寄せて、島に渡る船を海の上で沈めて、すべての王族を殺した。

典型的な易姓革命が可能だったのは、朝鮮半島の地政学的要素によると言えよう。

中国大陆の北方に万里の長城をつくつても、北方の遊牧民や狩獵民の南下を防ぐことができなかった。漢王朝以後の六朝時代に農耕民の漢人は侵入してきた五胡（非漢民族）に、百越の世界（中国南方）へ追われた。約二千年近くも前から遊牧民は中華世界でさまざまな王朝をつくり、約千年前から宋王朝と明王朝が中華の復興をはかったものの、やはりモンゴル人の大元と満州人の大清につぶされ、漢人の支那はついユーラシアの東部、東亜世界の歴史地図に消えてしまった。

支那人は孔子以来、数千年にもわたつて、「華夷の分別」を唱え、夷狄を「禽獸」と輕蔑したが、実際は中華世界で主役になることができなかった。漢晋以後、夷狄が中華、東亜の世界で一貫して優位を保ち、中華の万民に君臨していた。

習近平が「中華民族の偉大なる復興の夢」を連呼絶叫するのは、宋、明につづく「三度目の正直」を目指しているとも見られる。

では「偉大なる復興の夢」によって、はたして支那人は「歴史のさだめ」やら「中華文明の歴史の罫」を脱け出すことができるだろうか。そこにもやはり地政学的な宿命がある。

十、「史説」と「史観」について

本章で、「歴史認識」とは、過去の事実そのものの認識ではなく、認識主体の事情を反映する

ものであり、そのためずれや偏りが生ずるものとしなければならぬとした。さらには、自己への歴史認識はアイデンティティー（自己認識）形成に資するものであり、そのため自己愛によって彩られているとし、ずれや偏りは仕方ないものだ、とした。

しかし、だったら歴史認識というものは、でたらめで、全く恣意的なもので良いのかということになりそうだが、じつはそうはならない。やはりあくまでも、過去の事実拘束された存在でなければならない。

以上を考察するために、「史説」と「史観」について追究する。

過去にどのようなことが起こったのかを浮かび上がらせるのが歴史学の役割だとすれば、そのために、まず過去の事実に関わる資料を集める。ところがすでに過去になった事実には、判断に役立つ証拠、資料が必要なだけ十分に見つからないのが通常である。しかし実際にどのようなことが起きていたのか説明を求められる。とすれば、歴史学としては、その証拠や資料のない部分は想像して説明をするほかに方法はない。想像の部分は、色々と違ったものが出てくることになる。こうして出てくる説を「史説」または「学説」と言っただろう。

証拠や資料がないときにはそのまま沈黙しておればよいではないか、と考える人もいるかもしれないが、歴史的に重要な事件である場合、そうはいかない。証拠や資料がなくても起きたことの重大性から、どうしても想像を加えてでも説明をしなければならなくなる。

このことを分かりやすいように、日本の歴史の例で考えよう。

天正十年（一五八二年）六月二日未明、本能寺の変が起こった。このとき、謀反を起こした明智光秀の心中の思いは、我々が知りたいと思うほどには史料が残されていない。しかし本能寺の変がなく、織田信長が生き続ければ、日本の歴史は今日のようなものにはなっていない。豊臣秀吉の天下もないし、徳川幕府も開かれてはいない。

だとしたら、後世に及ぼした影響からも、明智光秀の謀反の動機を正確に知りたいと思うのは仕方がない。しかしそのための証拠となる史料は極めて限られている。

光秀は朝廷を守ろうとして謀反を起こしたという見方もある。しかし、この見方に対して極めて重要なことであるが、それを直接示す史料は存在していない。信長は、前半は確かに朝廷に多額の献金をし、大切にしてきた。しかし最後には天皇から官職は受けようとはしなかったし、正親町天皇に讓位を迫ったり、天皇の決める暦にまで口出すようになった。さらには、信長には日本人離れした性格で、残虐をいとわず、中国の皇帝のように何事も武力で解決しようとするところがあった。

とすれば、皇室への尊崇の念の強かった光秀としては、一身を犠牲にしてクーデターを起こしたのかもしれない。

それにしてもあれだけ用心深い信長があるとき、どうして本能寺であのような無防備な状態に自身を置いたのか。これも不思議である。

光秀の心中にさかのぼれば、この年の三月、甲州武田攻めが勝利に終わり、その祝いの席で、

多数の武将がいる中で、信長は光秀の頭を欄干に押しつけて光秀を罵倒した。さらには、五月十五日、家康への饗応役で叱責され、備中高松で戦っている弟分の秀吉への援軍を命ぜられる。光秀はここで、その二年前に起こった事件、織田家へ古くから仕えた佐久間信盛に対する冷酷ともいべき信長の追放のシーンに思い至ったかもしれない。

信長はこのときの光秀の謀反に対して、もう少し用心深くあつてよかったのではないか。にもかかわらず、どうして警戒しなかったのか。

もしかすると、この時点で信長が最も腐心していたのは、家康への饗応かもしれない。武田が滅亡した今、信長は家康を不要と見なすようになったかもしれないと、家康自身が思い込む可能性がある。そうではないとして家康を饗応に呼んだのであるが、家康からすればそこで自分は殺されるのかもしれないと不安になっているかもしれない。そのことに気がついていた信長は、そのためには家康への饗応が本当の歓待であることを示さなければならぬ。が、疑い深い家康には並みの饗応でそう思わせることはできない。そのために光秀に饗応させ、家康の知るところで故意に光秀をこっぴどく叱る。そうすれば家康から見て本当に歓待するための饗応だと信じていることができる。そのことに心を砕いていた信長は、光秀の心中の変化にまでは注意が及ばなかったということになるのではないか……。

本能寺の変について知りたくても知ることのできないことはいくらかもある。その知りたいところに想像を加えなければ、事件の全体像を示すことはできない。したがって後世の我々が行う想像が歴史学上の重要な要素となる。だが想像は人によって違う。結果は、それが史実に最も近い想像であるかを競うことになる。その想像による違いから出てきたものが「史説」である。

だが史説は、念のために繰り返すが、勝手に想像してよいものではない。過去に拘束されて、それが実際の過去により近いかを競うものだ。

次に「史観」を説明する。史観とは、個々の史実に対する真実を求めての認識ではなく、歴史を総観するとき、特定の見方を入れて構造化して見るときに出てくる全体としての見方である。「特定の見方」と言えば、客観的な表現に聞こえなくなるが、要するに特定の価値観を入れて総観することである。言いかえれば、主観を入れてまとめるということである。

「歴史認識」は主體的に行うものであるから、自国の歴史の認識ならば愛国心をもって総観してよい。自己の歴史の認識ならば、そうした恣意をもって見てよい。つまり、主観を入れた歴史の総観もあつてよい、ということになる。確かにこれは一定程度許されるが、これも歴史の真実に拘束されていることには変わりない。歴史学を専門にしている人たちの中で、史実でないことを証拠をもって指摘されても、かたくなに「史説」にこだわり、それが正しいと言い張る人がある。こういう人たちが唱える史説や史観は、すでに歴史学としてのそれではない。そしてその人たちはもはや歴史学者ではない。

繰り返すが、特定の史観から歴史を見るため、存在しない史実を存在すると思ひ込もうとし

たり、また、個々の史実は正しくても、特定の史観に都合のよい史実ばかりを並べようとするのも歴史学者のしてよいことではない。史観も過去の事実拘束されており、過去の真実の事実から拘束されようとする史観は許される史観ではなく、歴史を扱う上では廃棄しなければならない史観である。

よく言われる史観の中に唯物史観というのがある。マルクス(カール・マルクス)の唯物論による物差しに基づいた史観であるが、「唯物」という尺度で歴史を見ること、それ自体は許されるかもしれないが、特別な物差しによって、過去の真の事実をねじ曲げたり、削除したりすることがしばしばあり、歴史学的にはやはり、ことさらに歪んで見ていることになるから、やはりあつてはならない偏向の史観であらう。

日本では、東京裁判史観がある。東京裁判判決に基づいて日本史を総観しようとするものであるが、東京裁判は戦争に勝った側が負けた日本に強制的に行った裁判であり、明らかに公正なものではないから、やはり廃棄すべき史観である。

その他よく言われる「白虐史観」なるものがある。歴史は本来アイデンティティー(自己認識)を形成するためのものであるから、白らの歴史を白虐的に見るのは、廃棄されるべきものである。

史観の中に、自己の史観が絶対に正しい、絶対無謬だと主張する史観がある。言うまでもなく、中華史観がそれである。中華史観はまさに中華思想の下に、それが唯一正しい史観であり、

それ以外のものはすべて誤っている、とする史観である。中華文明の中では真顔で強調される史観であるが、それが人々をどれほど不幸にできたか。史観というものはほんらい、自由でなければならず、多種、多様であるということを前提にしなければならない。中華史観は、それ自体廃棄すべき史観である。

中国史は間違いだらけで、偽作も多い。やつと清の時代に入ってから、考証学が芽生え、それによって多くの史実が解明された。

「四書五経」の一つとして、中国最古の書とされる『尚書』(『書経』)は、すでに二千年前の漢代初期から「今文」と「古文」『尚書』の真偽の論争があった。やつと清の時代になって、『古文尚書』は孔子十一代目の子孫、孔安国の偽作だと論破された。

中国の経書の真偽については、その論証について、学派まで形成され、「弁偽学」などの発展がある。

中国の歴史そのものとは、巨大な嘘によって創作されたもので、「考証学」や「弁偽学」の知識がなくては、中国史の真偽を弁明することができない。張之洞の『輶軒語』によれば、真偽まで気にしたら古書の半数は棄てざるをえないということだ。

中国に、偽説、偽経、偽史が多いのは、中華の文化そのものが騙すための文化、「騙の文化」に基づいているからだ。今でも「すべてが嘘、ほんものはペン師だけ」と朱鎔基元総理まで嘆いたほどだ。

だから中国が言う「正しい歴史認識」についての「歴史認識」については、私は一貫して「逆観」「逆聴」「逆読」を薦めている。それは、決してただの逆説的言辭からではない。その嘘はそれなりに目的をもって言われているからだ。中国では政治的目的をもっていくらかでも嘘の歴史を創るのだ。嘘の歴史について、騙されないでその真実を知るためには、中国の政治目的を見破る以外にはない。

第二章 中華文明の原理